The Association of Art Education Newsletter

美術科教育学会通信 No.103 2020.02.20

□巻頭言　□第42回千葉大会予告（最終案内）　□提言
□新刊紹介　□本部事務局より

巻頭言
学会と「関係あり」

事業部担当副代表理事　大泉義一（早稲田大学）

緒言

時は令和に変わったと思ったら，すでに二年。昭和の真っ只中に生まれ，少年期を過ごし，続く平成では青年そして社会人として生き，今や壮年・中年となって久しい私にとって，何やら感慨深いものがある。さらに今年はオリンピックイヤーである。開催までのカウントダウンが連日報じられるほどの大盛り上がりだ（おかげで，私も開催まで200日を切ったことをきちんと認識している）。令和にしても，オリンピックにしても，メディアに取り上げられない日はない。別の言い方をすれば，この時期に何かを語ろうとするならば，「触れておかなければならない」気持ちに駆られてしまう時候の挨拶のようなものである。

「関係あり」

「令和」や「オリンピック」は，確かに今「ホットな」話題ではある。しかしながらこれらは，自分にとって全面的に「関係あり」の出来事なのだろうか。

「令和」については，元号の基に我国の暦が動いているのだから「関係あり」だ。かといって「平成」から「令和」に変わったことで自分の身の回りに何か変化がもたらされたのかというと，そんなことはない（叱られてしまうだろうが，唯一私にとっては，年賀状に「令和元年元旦」という恥ずかしい記載をしてしまった体験だけが印象的だった）。思い起こせば，「昭和」から「平成」に変わった時も同様だったし，「ミレニアム」の時も然りであった。「オリンピック」は「東京オリンピック」だから，その近辺に住む人間にとっては多少なりとも「関係あり」かもしれないが，全ての国民が興味をもったり参画したりするなどして「関係あり」にならねばならないのかというと，そんなこともなかろう。

どうやら，物事に対して「関係あり」とする判断は，それと関係をもつ個々の主体よりけりのようである。

現代のデザイン界に大きな影響をもたらしたデザイナーのひとりであるポール・ランドは「すべては関係していて，それが問題だ。」と言い切った。彼の発言の通り，これからはIoTによってモノとモノがつながることでヒトもつながり，あらゆるものが「関係あり」とされる超スマート社会が到来すると言われている。またSNSは，人々のネット空間における新たな出あいや関係を生み出した。私たち一人一人があらゆる「関係あり」のなかに包摂されるような社会，すなわちインクルーシブな社会の到来が予期されているのだ。

かように現代において「関係」は重要である。それは，すべての人々が過ごしやすい社会の実現につながることであるようだから，大いに歓迎すべきであろう。一方で巷では，SNSを駆使して巧みに「関係」を構築しているように見える若者の間で「〇〇疲れ」という言葉が多く聞かれるようになった。既読無視への気がかり，リツイート要求，フォロワー数の増減に対する一喜一憂など，FOMO（「Fear of Missing Out」の略。楽しい何かを見逃したり取り残されたりすることへの不安やSNSを常にチェックしなければ気が済まないような心理状況）と呼ばれる状態に陥っている（実際にSNSハードユーザーの知人が同じような感想を漏らしていた）。もともとはゆるいものであったはずのヴァーチャルな「関係」が，実際・現実の「関係」に強い影響を与えているのである。

また，私たちはスマホやＰＣを通して，Ｅメール，写真，位置情報等を，企業等に絶えず提供している。web

サイトを閲覧している際に，取捨選択された広告情報が勝手に画面に現れることを私も確認している。これはまさにグローバル規模の「超・監視社会」がもたらされつつあることの一つのあらわれであり，あらためて個人の自由について考える必要があるように思う。

以上，「令和」，「オリンピック」の話しから，何やら大げさな話しに拡大してきたが，どうやら現代においては「関係あり」を構築することは必須なふるまいであると同時に，私たちは望むと望まざるに関わらず「関係あり」を半ば強制されがちな世界に生きていることを自覚すべきなのではなかろうか。

学会との関係

翻ってみれば，こうした「関係あり」をめぐる状況と同じように，私たち学会員と学会との関係についても一考を要すると思われる。

私たちが，いったいなぜこの学会に集うのか，この問いはあまりに素朴であるがゆえに，取り立てて話題になることは少ないように思う。かくいう私の場合は，中学校の教員として実践家であった際に，自身が日々行っている教育実践の普遍的な意味を問いたいという切実な欲求に従って学会という場に足を踏み入れた記憶がある。今では立場は変われど，自身の研究探究について問い，議論し，そして新たな知見を得るための機会として，同様に切実な欲求のもとに関わっている。

本学会第 7 期代表理事の金子一夫は，本学会の性格を「学会内での政治，例えば，研究の立場の主導権争いや学閥といったものは，全くと言ってよいほど無い。これはかなり前からそうなっていて，よいことである。」と評している（『美術科教育学会通信 第 76 号』）。ここで先ほど述べた現代における「関係あり」をめぐる状況を思い出していただきたい。放っておけば恣意的・権威的な「関係あり」に包摂されがちな学会員と学会との関係が，学会員一人一人の切実な「関係あり」という自由意志によって構築されるべきことをあらためて自覚しておきたい。

レヴィ＝ストロースは，社会や組織に対する「真正さの規準」とは，個人間での具体的関係の広がりと豊かさで測ることができるとし，それは国家や市場，メディアなどに媒介された間接的なコミュニケーションと，成員一人一人の身体的な相互的・直接的なコミュニケーションという対比において，後者のもつ実感覚や具体性によって評価がなされるものと述べている。学会とは「学者相互の連絡，研究の促進，知識・情報の交換，学術の振興を図る協議などの事業を遂行するために組織する団体」（『広辞苑』より）なので，学会員と学会員，学会員と学会とが緊密に関係をもつことはもちろん大切なのだが，それ以上にその関係のもち方（「関係あり」の内実）が重要なのだ。学会員一人一人が自身の「切実感」や「欲求」を携え，完全な「自由意志」に基づいて本学会に入会・所属し，そして互いに関係をもつ（もちろん大学院生などはそうとばかりは言ってられないであろうが）。このような「真正さの規準」に基づく「関係あり」を今後も維持していきたいものだと強く願う。

また，そうした関係は，会員という「個」の関係だけでなく，「他組織」と学会との関係においても適用されるべきであろう。本学会も，当然ながら様々な組織と関係をもっている。教育現場，教育行政（国や自治体），他学会，海外の組織，そしてひろくは同時代社会のあらゆる組織との関係において本学会は成立している。昨今において学術研究に対する社会実装が強く求められ，即社会の「役に立つ」研究成果が高く評価される傾向が強まっていることは，各種研究助成の採択状況を見れば明らかである。ノーベル医学・生理学賞を受賞した本庶佑は，若手研究者を支援する 1 千億円規模の基金を設立し賞金を寄付する意向を示しているが，その背景にあるのは，研究者を取り巻く環境の悪化や基礎研究の取り組みが低迷する国内の現状への危機感である。本来的に学会は，「学問の独立」ではないが，行政府や経済動向（いわゆるマーケティング）に対して独立した立場を取りつつ，学会としての「切実」かつ建設的な言論を表明すべきであることは，現代においていっそう重要なのだ。イヴァン・イリイチが，近代における教育の搾取を「Schooled」と呼び，「教育＝学校教育」の図式に陥っている状況に警鐘を鳴らしたように。以上のように，他組織と学会との関係を再考することは，急激に変化してゆく今後の教育・社会に対して，本学会がどのような役割を果たすべきなのか，という学会の存在意義にかかわる重要な命題足り得る。

あなたと学会の関係

さて，今この駄文をお読みになっている諸氏は，一個人としての学会員であると同時に，きっと何らかの組織に所属する組織人であろう。小生のこれまでの戯言に対して，どんなことをお思いになっただろうか？

本学会第 8 期代表理事の水島尚喜は，本学会の組織活動を織物の経糸と緯糸に例え，前者は学会誌であり，後者は研究部会の活動やリサーチフォーラムであるとし，それらが相互に緊密に関係し合うことで学会が成立すると述べている（『美術教育学叢書 第 1 号』「創刊の辞」）。

このように，本学会は美術教育学という共通の土壌のうえに紡がれる縦横無尽な「関係あり」のネットワークによって成り立っている。今後もそうした関係が，学会員一人一人の「切実感」や「欲求」に基づいて構築されることを心より願っている。そしてそのことだけが，「美術」という既有の教科教育学を基盤とする本学会が他教科・他分野の学問領域や社会等との真正な「関係あり」を構築してゆく際の道しるべになるのではなかろうか。

千葉大会予告（最終案内）

第 42 回 美術科教育学会 千葉大会

大会実行委員長　神野真吾（千葉大学）

第 42 回美術科教育学会千葉大会　　令和 2 年（2020）年 3 月 27 日(金)・28 日(土)

大会テーマ 「逸脱の価値，逸脱の方法」

新年を迎え,オリンピックイヤーでもある 2020 年となりました。成長から停滞，そして衰退という時代の流れの中に我々がいることを強く感じさせる情報が，耳に目に飛び込んできます。多くの皆さんも感じておられるように，オリンピック後に素晴らしい未来が待っているとは残念ながら思えません。むしろこれまでのやり方の限界がはっきりと示されることになるでしょう。その先の日本の姿をどのように想像し，どのような社会を創造していくのか，教育に関わる私たちに向けて切実な問いが突き付けられているように思われます。
その節目の年に行われる美術科教育学会千葉大会で,未来を創造的に切り開くことへとつながっていく多彩な研究発表および議論が展開されることを期待しております。

****
大会参加の締め切りは 2 月 27 日の 24 時です！！
****
・大会参加の登録は以下のサイトでお願いします。
大会ホームページ　https://bit.ly/2laPyup　※短縮 URL
※払い込みの確認の効率化のためにも事前登録をお願いします。

****
事前の払い込みをお願いします！！
****
・事前に参加費・懇親会費の払い込みをお願いします。
こちらも2020年2月27日(木)24時が締め切りです。

【払い込み方法】
★オンライン
千葉大会では，オンライン上での参加費・懇親会費の支払いに対応しています。
以下のサイトから申込みをしてください。QR コードでも可
https://artedu-chibataikai.peatix.com

決済方法は以下の 3 つからお選びいただけます。
①クレジットカード:VISA,MasterCard,JCB,AMEX,PayPal
②コンビニ：LAWSON，FamilyMart，サークル K，サンクス，Mini Stop，Daily Yamazaki，Seicomart
③ATM：Pay-easy，ゆうちょ銀行，ジャパンネット銀行，楽天銀行，自分銀行

★郵便局等での払い込み
郵便局等での振り込みを希望する場合は，以下の振り込み先に振り込みをお願いします。
郵便局の払込用紙による払い込み，または銀行等からの振替。
・銀行名：ゆうちょ銀行
・口座記号番号：00290-0-142028
・口座名称：神野真吾
※通信欄に　会員 ID 番号　氏名を必ず記入願います。

入金締切日までにご入金いただけない場合，事前参加登録および研究発表は自動的にキャンセルされます。

千葉大会についてのお問い合わせ
メール：art.edu.chiba@gmail.com
電話：090-2729-6163（神野）
※できるだけメールでお願いいたします。

	学会		懇親会	
	事前申込	当日受付	**事前申込**	当日受付
正会員*	**4500 円**	5000 円	**5000 円**	5500 円
非会員**	**5500 円**	6000 円	**5000 円**	5500 円
大学院生等**	**2500 円**	3000 円	**3500 円**	4000 円

*「大学美術教育学会」又は「日本美術教育学会」の会員は本学会会員と同様に，正会員の料金で参加できます。その旨を，払込用紙の通信欄等にご記入ください。
**会員又は非会員の大学院生は，「大学院生等」の金額が適用されます。ただし，社会人の大学院生は「正会員」の金額が適用されます。

★懇親会は，フードデザイナーの中山晴奈氏監修。ご期待ください。

■大会日程

〇理事会 2020 年 3 月 26 日(木)15:00～　教育学部五号館 5501 教室

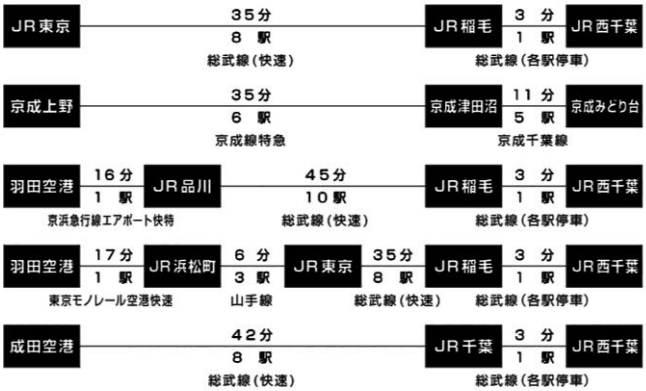
〇大会 1 日目 2020 年 3 月 27 日(金)
8:30 受付（2 号館）
9:00 開会式（2 号館 2 階 2207 教室）
9:30 研究発表Ⅰ（2 号館 2 階）
11:45 昼休み
13:00 研究発表Ⅱ（2 号館 2 階）
16:00 研究部会（2 号館 2 階）
18:00 懇親会（19:30 終了予定）

〇大会 2 日目 2020 年 3 月 28 日(土)
9:00 受付（2 号館）
9:15 研究発表Ⅲ（2 号館 2 階）
12:05 昼休み
12:45 総会（大講義室）
13:45 シンポジウム（大講義室）
15:45 研究発表Ⅳ（2 号館 2 階）

◎シンポジウム「逸脱の価値，逸脱の方法」
会場：教育学部大講義室　13;45～15:30
登壇者:志田陽子（武蔵野美術大学，憲法学），卯城竜太（Chim↑Pom，アーティスト），西村徳行（美術科教育学会，東京学芸大学）
モデレーター:神野真吾(美術科教育学会，千葉大学)
※このシンポジウムは学会員以外にも無料で公開します。

■アクセス

最寄駅は JR 総武線西千葉駅，京成みどり台駅です。総武線快速は西千葉駅には停まりません。稲毛駅で各駅停車に乗り換えてください（1 駅）
羽田空港からは京急で品川駅まで出て，総武線快速に乗り換えるのが効率が良いです。
西千葉駅に着いたら，改札を出て左手の北口から出てください。前方左手が千葉大学です。みどり台駅からは改札を出て正面の道を左手方向に直進すると千葉大学の正門に着きます。共に教育学部 2 号館まで 10 分ほどかかります。

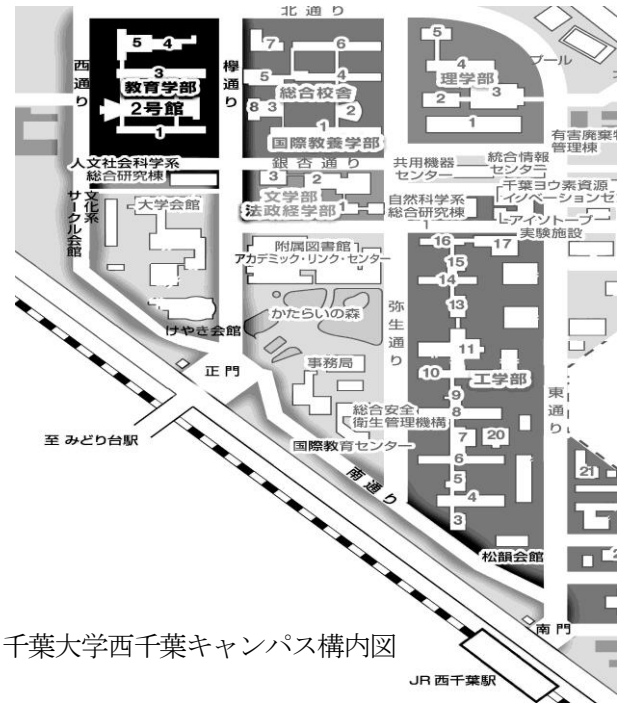


■食事

お弁当の手配などはいたしません。各自ご用意いただくなど対応を願います。正門，北門，南門のそばにコンビニ等があります。

■宿泊

宿泊施設の手配はしておりませんので，各自でご対応をお願いいたします。近隣だと千葉駅周辺にビジネスホテル等がございます。東京駅方面からですと 1 時間程度の移動時間をみてください。
幕張新都心にはホテルが多いですが，京葉線沿線ですので，西千葉に行くのにはやや不便です。



千葉大学西千葉キャンパス構内図

■1日目　3月27日(金)

	A会場(2201)	B会場(2203)	C会場(2205)	D会場(2207)	E会場(2208)
① 9:30 ～ 10:00	高等学校における協働学習に基づいた映像メディア表現の教育的効果 片桐彩 神奈川県立 相模向陽館高等学校	[絵画・以降]の時代に構想する絵画教育の題材開発－ブリジット・ライリーの「ストライプ絵画」が生み出す線と色彩の相互扶助－ 保富仁之 和歌山県立田辺高等学校	インタラクティブ・アート環境下における幼児の遊び～プログラミング教育に向けたメディア体験アプローチの可能性～ 井上昌樹 東京福祉大学短期大学部	美術教育における学力分析～ルーブリックを用いた鑑賞学習の効果測定～ 奥村高明 日本体育大学 一條彰子 東京国立近代美術館 宮本友弘 東北大学 平野智紀 内田洋行	STEAM教育における美術と異領域の統合原理の考察(2)－STEAM授業フレームワークの提案－ 上野行一 美術による学び研究会 畑山未央 東京家政大学
② 10:05 ～ 10:35	個人向け3D機器を用いた＜美術科授業題材＞開発のための基礎研究 加舎章二郎 八尾市立東中学校	体験者が学びとして自覚できる造形活動体験についての研究 菖蒲澤侑 文京学院大学人間学部	トーランスの創造性テストの再考と試行Ⅱ—A園における実態調査と分析の展開— 白石恵里 中村学園大学 犬童昭久 九州ルーテル学院大学 王寺直子 認定こども園あかさかルンビニー園 栗山裕至 佐賀大学 丁子かおる 和歌山大学 樋口和美 福岡女子短期大学 前村 晃 佐賀大学名誉教授 宮崎祐治 神野こども園	美術館の所蔵作品を活用した探究的な鑑賞教育プログラムの開発 一條彰子 東京国立近代美術館 奥村高明 日本体育大学 寺島洋子 国立西洋美術館 細谷美宇 東京国立近代美術館	贈与交換システム論的美術教育学における学習者間交換 金子一夫 茨城大学名誉教授
③ 10:40 ～ 11:10	3Dデータを活用した彫刻制作トレーニングの実践研究 西村幸一郎 佐賀大学	「エアクロッキー」「3分クロッキー」からみえる中学生の美術観 中川知子 つくば市立高崎中学校	造形遊びの実践研究～保育園の実践を通して～ 江村和彦 日本福祉大学	知識構成型ジグソー法を用いた美術鑑賞の授業デザイン－造形的な見方・考え方を深める学びの過程に着目して－ 古田啓一 小田原短期大学 名古屋サポートセンター	逸脱の術：矛盾形容語法としての「美術教育」 北野諒 大阪成蹊短期大学
④ 11:15 ～ 11:45	動画表現におけるストーリー共有の可能性 上山浩 三重大学	色彩感情効果学習とカラーシステム学習の活動過程が学習者の表現活動に与える影響についての一考察 松浦藍 岡山市立福浜中学校	幼稚園アプローチカリキュラムにおける造形遊びの題材開発についての一考察 藤谷貴代 北斗市立大野小学校	実践的対話論の考察と鑑賞対話の分析 佐藤哲夫 新潟大学	美術における「表現」と「創造」を分けて考える 縣拓充 東北大学
昼休み					
⑤ 13:00 ～ 13:30	美術のワークショップ実践者の支援に関する研究 廖曦彤 筑波大学大学院	「剪紙(せんし／切紙)」表現の成熟—中国・義烏塘李小学校再訪(2019年4月25日)にて— 佐藤昌彦 北海道教育大学 徐英杰 華東師範大学 宮脇理 元筑波大学	学生の図画工作科指導に関する資質・能力の育成方法に関する試みⅡ 西尾正寛 畿央大学教育学部 山田芳明 鳴門教育大学 廣瀬聡弥 奈良教育大学	日本美術科教科書の美術史年表に掲載の国外美術作品の検討 山口喜雄 元 宇都宮大学	現代の小学生の人物の描写傾向に関する研究Ⅳ 花輪大輔 北海道教育大学札幌校
⑥ 13:35 ～ 14:05	学校におけるアーティストによるワークショップ型授業を支える実践共同体の研究～コーディネーターに着目して～ 竹丸草子 群馬大学大学院	これからの時代の授業評価方法の研究－中学校「美術」教科に着目したベトナム社会主義共和国との比較 木村祐介 鳴門教育大学大学院	若手教員の初年度授業力充実をめざす教員養成教育についての研究 隅敦 富山大学人間発達科学部	倉橋惣三の粘土造形教育観(2)－雑誌『幼児の教育』掲載「保育座談会－粘土－」より－ 神谷睦代 新潟県立大学人間生活学部	児童の協同的な造形活動における相互作用への質的アプローチ 武田信吾 鳥取大学 松本健義 上越教育大学 栗山誠 関西学院大学
⑦ 14:10 ～ 14:40	アーティスト・イン・スクール(AIS)の挑戦Ⅲ ～中学校美術教育における映像表現題材の協同開発と実践～ 鈴木紗代 前橋市立第六中学校 住中浩史 群馬大学大学院 小田久美子 アートコーディネータ 茂木一司 群馬大学	「ヴァルドルフ子ども園」における造形活動の実際 吉田奈穂子 関西外国語大学	図画工作・美術科における教師の発話に関する実践研究：「第3教育言語」の概念は、授業研究に"使える"のか？ 大泉義一 早稲田大学 永縄 啓太 横浜市立南太田小学校	満鉄教育研究所における手工教育の考察—「満鐵教育たより」の手工関係記事を手がかりに— 齊藤暁子 名古屋大学大学院 宮脇理 元筑波大学	子どもの描画活動の観察・援助記録の計量テキスト分析の試み 大江登美子 佐賀女子短期大学

⑧ 14:45 ～ 15:15	子どものアート的身体／思考を促す造形活動の考察―BFAプロジェクトの実践を通じて― 宮川紗織 群馬大学 梶原千恵 群馬大学大学院 石原加奈子 群馬大学大学院 郡司明子 群馬大学	フィンランドにおける映像メディア表現教育の様相～学校教育と連携する教育機関の実践～ 甲田小知代 新潟大学大学院	専門性を活用した教員研修における一考察―複合型教員研修プログラムにおける実践から― 石賀直之 東京造形大学 小林貴史 東京造形大学 山田猛 東京造形大学	明治期図画手工教科書データベースの活用による史的研究の可能性 赤木里香子 岡山大学大学院 山口健二 岡山大学大学院 金子一夫 茨城大学名誉教授 角田拓朗 神奈川県立歴史博物館	小学校図画工作における高学年児童の「発想・構想」の指導法―児童の多様性と苦手意識の要因を見取る指標の構築を通して―
⑨ 15:20 ～ 15:50	美術教育における「アート的身体」論を実装するパフォーマンスの実践／理論研究に向けて 郡司明子 群馬大学教育学部	集団で創造するアートテクニック「オープンフォーム」―チェコ共和国カレル大学における実践事例とその意義 家﨑萌 兵庫教育大学大学院 連合学校教育学研究科	自己調整学習者を育てるための高等学校美術学習モデルの開発（第二報） 岩佐まゆみ 大分県立大分西高等学校 藤村和音 大分県立大分西高等学校 上野行一 美術による学び研究会	二十恩物の明治期における変遷 水野道子 小田原短期大学	中学校美術科における「発想の能力」を育むためのインプロゲーム活用の可能性 平田実 福生市立福生第一中学校
研究部会　16:00～17:30					
懇親会18:00～19:30　会場2111					

■2日目　3月28日（土）

	A会場（2201）	B会場（2202）	C会場（2203）	D会場（2204）	E会場（2205）
⑩ 9:15 ～ 9:45	東京造画館の掛図に関する研究（2） 牧野由理 埼玉県立大学	美術科の指導におけるメタ認知モニタリングの効果 谷田良子 女子美術大学 渡邊奈菜 神奈川県立横浜明朋高校 前田基成 女子美術大学	視覚や聴覚に障がいのある人と共に楽しむワークショップの実践を通して 亀井幸子 徳島県立近代美術館 髙木夏奈子 植草学園大学	「造形遊び」における子どもの探究―矛盾の構築と表現世界の形成過程との関係性―	「触って見る動く生き物たち」展の成果と課題―展示空間と材料の考察を中心に―
⑪ 9:50 ～ 10:20	想画教育における発想・構想力の視点とその展開 山田一美 東京学芸大学	大学生の実技制作授業で見られるありふれた問題状況に関する考察 山下暁子 和光大学	聴覚障害のある留学生との美術を通した交流プログラムの実践研究 池田吏志 広島大学	「造形遊び」の過程で育成される資質・能力の評価に関する研究 佐藤絵里子 東海大学短期大学部	ゲーヒガンによる探求ベースの批評学習モデルを援用した学習法―高等学校における作品情報の活用に着目した実践から―
⑫ 10:25 ～ 10:55	「創美論争」とは何か―創造美育運動に関する研究（3）― 新井哲夫 群馬大学名誉教授	「いつか気づくといい。」言語以前と言語をつなぐ美術教育の役割 長島春美 元東京都立田柄高等学校	肢体不自由児の「造形遊び」におけるスタンダード開発 森田亮 筑波大学附属 桐が丘特別支援学校	「造形遊び」の教科内容としての位置付けとその認識に関する考察―小学校指導書・学習指導要領解説書の比較分析を中心に―	鑑賞活動の科学的効果測定に関する一考察（1）視線解析技術の先行研究に基づく測定法の試案 畑山未央 東京家政大学 結城孝雄 東京家政大学 村上尚徳 環太平洋大学 佐藤真菜 鳥取県立博物館 山本亮 鳥取県立博物館

⑬ 11:00 ～ 11:30	Bauhausの水谷武彦と日本における「構成教育」の起点 長田謙一 首都大学東京	図画工作科と外国語活動の教科融合型学習の開発－3年生での絵に表す実践の成果と課題－ 藤井康子 大分大学教育学部 岩坂泰子 広島大学教育学部 水城久美子 福岡市立香椎東小学校 樋口和美 福岡女子短期大学子ども学科	文化芸術による社会包摂のプログラム評価：麦わら屋の事例研究 茂木一司 群馬大学教育学部 竹丸草子 群馬大学大学院 小田久美子 アートコーディネータ 木村祐子 社会福祉法人清水の会	自然への愛着を育むESD題材「造形遊び」の検討 松井素子 東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科	鑑賞活動の科学的効果測定に関する一考察（2）視線解析における測定妥当性の検討 結城孝雄 東京家政大学 畑山未央 東京家政大学 村上尚徳 環太平洋大学 佐藤真菜 鳥取県立博物館 山本亮 鳥取県立博物館
⑭ 11:35 ～ 12:05	美術教育学の制度的基盤の成立過程―千葉大学― 有田洋子 島根大学	焼き物楽器の教材開発 ―造形と音楽表現活動、図画工作と音楽科の融合を目指して― 本田郁子 名古屋経営短期大学 笹谷朋世 日本福祉大学	附属特別支援学校との連携活動「どろんこプロジェクト」 加藤可奈衛 大阪教育大学 青木宏子 大阪教育大学 谷村 さくら 大阪教育大学	情動の媒介性に着目した学習環境デザイン研究Ⅰ―造形遊びの事例から― 守屋建 東京学芸大学附属小金井小学校	ルーブリック評価による美術鑑賞学習の実践と考察 新関伸也 滋賀大学教育学部
昼休み 12:05～12:45					
総会 12:45～13:30 大講義室					
シンポジウム 13:45～15:30 大講義室					
⑮ 15:45 ～ 16:15	ソーシャル・プラクティスによる教育: 多様な当事者の参加によって形成される社会に向けて 細野泰久 武蔵野美術大学非常勤講師	個に即した象徴的表象研究－リアル/デフォルメ尺度の検討とその調査から－ 髙橋文子 東京未来大学	納富介次郎と美術教育（4）―アートの公共性と納富が残した価値（1）― 松尾豊 元高岡第一高校教諭	「葡萄」を共通項とする連結型読解鑑賞学習モデルの提案―ロット「救世主キリスト，聖人達，異端派の屈服，聖女バルバラ伝（1524年）」他の鑑賞― 岡田匡史 信州大学教育学部	グローバル市民を育成する美術による異文化間カリキュラムの開発 中村和世 広島大学
⑯ 16:20 ～ 16:50	こどもにとっての「アクチュアルな社会」とは―図画工作・美術科のよりよい授業実践のために― 新井馨 大阪教育大学	中学生にとっての「描くこと」その2「『ここから見るとおもしろい！』 濱脇みどり 西東京市立青嵐中学校	海外美術教育研究セミナーが果たした美術教育史的役割についてⅠ 山木朝彦 鳴門教育大学 仲瀬律久 聖徳大学名誉教授 山田一美 東京学芸大学 岡崎昭夫 筑波大学名誉教授 赤木里香子 岡山大学大学院 前村晃 佐賀大学名誉教授 宮崎藤吉 元生駒小学校	鑑賞能力と「場面」規定及び「愛の表現」箇所の指摘活動の関わり―マルク・シャガール作『青い天使』の鑑賞（中学3年生）を題材として― 立原慶一 宮城教育大学	地域社会が新たに求める文化芸術資源の運用モデルについて―洋画家・国吉康雄作品とその基礎研究の市民への還元を目的とした参加型アートイベントと学際的展覧会等の組成― 才士真司 岡山大学大学院 伊藤駿 岡山大学大学院
⑰ 16:55 ～ 17:25	芸術実践者のための方法論研究Ⅰ：E・W・サイードのオリエンタリズム（ポストコロニアル理論）と「西洋」による抽象芸術の独占への批判 梅田力 星槎道都大学	図画工作科・美術科における観察による描画表現の衰退とその理由 中村儒纏 東京藝術大学	海外美術教育研究セミナーが果たした美術教育史的役割についてⅡ 宮崎藤吉 元生駒小学校 赤木里香子 岡山大学大学院 仲瀬律久 聖徳大学名誉教授 前村晃 佐賀大学名誉教授 岡崎昭夫 筑波大学名誉教授 山木朝彦 鳴門教育大学 山田一美 東京学芸大学	工芸鑑賞指導の視点の提案 小口あや 茨城大学	地域社会を拓く対話的な場におけるイメージメディアの可能性を探る―「ふるさと熊本アートプロジェクト2019 ‘星あかり 七夕夢美術館 Beyond the Southern Cross’」〔復興支援を目的とした授業開発と国際交流の実践〕－大学院からのアプローチを中心に－ 赤木恭子 熊本大学

※複数の所属名がある場合は，最初のもののみ記載しています。
※参加予定者には発表の司会をお願いする場合があります。ご協力ください。

提言

脚下照顧　これからの美術教育研究を問う

三澤一実（武蔵野美術大学）

はじめに

学会の統合の動きが議論されているようだ。個人的な意見を述べさせていただければ，更に先の美術教育諸団体との統合あるいは大きな傘下に集まる組織化が待った無しで迫っていると感じている。美術教育に関する研究も現場の教育実践が無くなれば研究を反映させるフィールドも消える。私たちは何のために研究を推し進めているのであろうか。もちろん美術教育は学校教育に特化したものではない。今までになくアートの必要性が語られるようになった現在，その研究の視点は多岐に広がる。しかしながら，今まで蓄積してきた先達の財産を未来につなぐこともしなくてはならない。美術教育が無くなる？それは荒唐無稽な予測ではない。この間の国の教育政策を見ていると，いつ教科統合や新たな教育課題の前に，教科「図画工作」「美術」が変質してもおかしくはない。我々には国の政策にエビデンスを持って提言できる力が必要なことは論を待たない。

2 つの全国大会

昨年の 11 月 21 日，22 日に全国造形教育連盟（全造連）と日本教育美術連盟（日美連）の合同研究大会愛知大会が名古屋市内の各会場で行われた。この 2 つの研究大会は，幼小中高大の現職教員による造形美術教育の研究大会で今まで日本の美術教育を強力に牽引してきた。全造連は各都道府県の造形教育研究団体の連合体として戦後 1948（昭 23）年に発足し今まで 72 回の大会を開催してきた。日美連は現職教員によって図画工作・美術教育研究団体連絡機構・西日本教育美術連盟として 1949 年に設立され大会は 70 回を数える。研究会の成り立ちや性格は異なるものの，その違いを乗り越えて 2007 年に初の合同研究大会が開かれ，それ以降 5 度の合同開催を実現させている。

その愛知大会では，基調講演，各団体の行事のほか，研究授業と各分科会があり，筆者が参加した小学校では，今日の教育課題であるカリキュラムマネジメントを踏まえた公開授業が行われ研究協議も盛り上がった。

全造連大会には毎年台湾から小中学校の教員が 20 人ほど訪れている。今回も熱心に研究協議に参加し，通訳を介し貪欲に日本の実践から学ぼうと多くの質問を矢継ぎ早にしていたが，台湾は美術館教育，STEAM 教育，教育行政では日本の先を歩んでいる。大学の教員も，指導助言などで大会全体で 10 名ほど参加していただろうか。大学の授業で使うと熱心に撮影されていた先生もいた。このような大会は，現場の実践を学生指導に生かしたり，輩出した卒業生の活躍の様子から明日の教員養成のあり方を問い直すセルフチェクとしても機能する。

全国の現場では

筆者は旅するムサビプロジェクトという取り組みを 12 年続け，全国 27 都道府県で鑑賞や造形ワークショップなどを 400 件近く行ってきた。各学校を訪れる度に様々な子どもたちの作品などを目にする。中には目を背けたくなるような画一的な描画方法で描かれた絵が飾られている学校があったり，全校児童 10 人にも満たない小学校で子どもたちが伸び伸びと表現し大いに元気をもらった事もあった。押し延べると，現場から子どもたち，そして教師の悲鳴が聞こえてくる事の方が多い。それは，小学校では図工の指導が分からないという先生の多さ。中学校では未だに見栄えのよい作品をつくらせる指導に止まり，そして子どもたちの眠っている資質や能力を十分に引き出せていない…。そこには，教師が主体的に学ぶことができる環境の貧しさがある。一部の教師は自ら進んで学ばなくとも，閉じた学校環境で美術という専門性にあぐらをき，教師という権威で何十年も変わらない授業をしていても誰からも文句は出ない状況だ。子どもたちは教師を選べないし，他校の状況を知らない以上それが美術教育のすべてとなる（教育実習生が実習校から戻り毎年多くの報告を受ける）。教員養成に関わっている仕事柄，現場における大きな課題に胸が痛くなる。

中学校では美術科における免許外教員の多さも課題である。５年前から日本教育大学協会美術部門（教大協）で

は全造連大学部会の会員として全国の美術科教師の専任数及び免許外担当教員の数を調べている。調査方法は全国造形教育連盟の都道府県の事務局担当者に郵送で依頼する。回収率は５割程度であり年を経るごとに回収率が悪くなる傾向にある。未回収の都府県については様々な原因が推測できるが一番の要因は研究組織の弱体化によるものであろう。教師の多忙，高齢化及び年齢構成のいびつさ，教員数の減少…。実際各都道府県では毎年の造形教育研究大会の担い手がおらず開催できない地域も増えてきたと，先述の研究大会に出席した校長が嘆いていた。そもそも全国大会を維持していくことも難しい時代になってきた。この様な美術科専任教員の数によって生じる美術教育の格差は地方だけのものではない。美術科教員の充足状況で言えば，東京都などは免許外教科担任の許可件数は０件（全教科）である[i]。しかし，非常勤教員の数が多い。東京都は美術科教員の免許を取得できる大学も多く非常勤教員を確保しやすい都市である。容易に人材は集められる（それでも現在，首都圏では非常勤及び産休代替教員が不足している）。この様な非常勤教員の導入の結果，研修の義務を負わない（研修に参加できない）非常勤教員は市区町村の研究組織に所属せず，結果として組織の弱体化は進む。美術教育の質の向上は図れない。

平成30年度　中学校美術科教員実態調査の結果

		1．都道府県・政令指定都市	2．公立学校数	3．美術科専任教諭配置校数	4．臨時的任用教員対応校数	5．非常勤教員・講師対応校数	6．免許外教員で対応校数	7．複数校兼務担当教員数	備考
1	北海道	北海道	489	272	12	21	162	15	不明7名
		札幌市	99	88	5	1	5	0	
2	青森県	青森県	156	67	2	7	79	3	
3	岩手県	岩手県	160	78	18	53	11	0	
4	宮城県	宮城県	―	―	―	―	―	―	「不明」と連絡あり
		仙台市	66	55	8	13	0	0	
5	秋田県	秋田県	114	79	7	22	10	6	県立中高一貫校は高校教諭が指導
6	山形県	山形県	97	78	8	10	3	4	
7	福島県		199	115	7	41	39	16	※H27調査
8	茨城県		223	217	25	0	0	－	※H27調査
9	栃木県	栃木県	158	96	7	52	8	8	
10	群馬県	群馬県	160	110	6	35	7	2	
11	埼玉県								
12	千葉県	千葉県	342	―	―	―	―	―	「不明」と連絡あり
		千葉市	60	54	1	5	2	1	
13	東京都								
14	神奈川県	神奈川県	173	172	22	26	0	―	
		川崎市	52	52	5	9	0	―	
		横浜市	147	87	20	40	1	―	
		相模原市	37	37	5	8	0	―	
15	新潟県	新潟県	178	106	0	67	0	26	
		新潟市	56	49	0	2	0	7	
16	富山県	富山県	80	67	1	10	2	―	
17	石川県								
18	福井県	福井県	78	―	―	―	―	―	調査できず
19	山梨県	山梨県	86	40	7	38	1	0	
20	長野県								
21	岐阜県								
22	静岡県								
23	愛知県	愛知県	―	―	―	―	―	―	調査できず
		名古屋市	111	94	4	13	0	0	
24	三重県								
25	滋賀県	滋賀県	99	79	12	7	0	5	
26	京都府	京都市	73	40	11	46	0	0	
27	大阪府								
28	兵庫県								
29	奈良県	奈良県	103	60	17	0	0	0	
30	和歌山県								
31	鳥取県	鳥取県	57	51	5	12	0	10	
32	島根県	島根県	97	53	3	37	2	5	
33	岡山県	岡山県	116	57	6	50	5	7	
		岡山市	41	32	4	12	0	0	
34	広島県		179	54	9	108	0	4	※H27調査
35	山口県	山口県	143	67	14	34	27	4	
36	徳島県	徳島県	81	55	3	5	18	1	
37	香川県		73	60	3	10	0	4	※H27調査
38	愛媛県								
39	高知県								
40	福岡県								
41	佐賀県	佐賀県	90	61	9	20	0	1	
42	長崎県								
43	熊本県		121	76	7	10	28	3	※H27調査
44	大分県		155	74	21	11	52	―	※H27調査
45	宮崎県	宮崎県	―	―	―	―	―	―	「不明」と連絡あり
46	鹿児島県	鹿児島県	217	94	5	31	87	0	
47	沖縄県								

調査期間：平成30年7月10日から平成30年11月25日までの約5か月間
調査対象：全国造形教育連盟の都道府県の事務局担当者
調査内容：美術科教員の公立中学校学校への配置状況
調査方法：郵送によるアンケート調査（ただし、回答はe-メールでも可とした）
回 収 率：35/67＝約52%（事務局単位で算出）

幼児教育の保育士，教員養成から

２年前まで全国大学造形美術教員養成協議会（全美協）の会長をしていた。全美協は，国立大学の教員養成学部で組織する日本教育大学協会全国美術部門（教大協）に加盟できない私学の保育士，教員養成課程がある大学と，国公立の美術の専門学部で教員養成課程を持っている大学が機関加盟し，2019 年度は 180 校が年会費を納入している。会員の多くは幼保教育の教員及び保育士養成の大学である（全美協と教大協の２つの組織は大学造形教育連絡協議会を持ち，全造連の大学部会として機能している）。

全美協では月に１回メールマガジンで全国の会員の授業実践が紹介される。筆者は中，高の美術・工芸の免許を出す教職課程の教員なので，幼児教育の現場で行われている実践についてはいつも興味深く拝読している。幼児教育での学びが小学校，そして中，高と発展して行くことを考えると，幼児期のしなやかでみずみずしい造形体験の充実が，感性豊かな人を育てることに繋がると強く感じる。

さて，国が進めている教員養成課程の改革では幼稚園教員，保育士養成課程においても資質・能力ベースの課程編成が迫られ，新課程では造形活動に関わる「表現」領域で，これまでは造形的表現・音楽的表現等というように分けて教授してきた実態を，統合的に指導したり，領域と指導法を一体的に扱うモデルが示され，造形的表現は大学独自で設定する科目となった。保育士・幼稚園教諭養成課程には造形担当の専任がいない大学も多く，資格・免許の取得において最低限の科目しか履修しない学生は，職に就く場合，造形体験の不足を抱えて教育現場に出て行くことになる。

まして，今日の学生が小中学校で学んできた造形活動は我々が体験してきた頃と比べると圧倒的に素材体験や造形体験が不足している。このこと

は美大に進学してくる学生を見ていても実感できる。今後，小学校図画工作，そして中学校美術，高校と造形表現に関わる資質能力の伸長はどこまで期待できるであろうか。

教育は変えられるか

次期学習指導要領の改訂はどうなるか。2019 年４月，学習指導要領の告示から未だ２年数ヶ月しか経っていない中，文部科学大臣柴山昌彦から「新しい時代の初等中等教育の在り方について」の諮問が中央教育審議会に出された。今後この答申を基盤にした「新しい時代」へのレールが敷かれるだろう。

次期改訂に学会が持っている美術教育の諸研究を盛り込むのであれば，おおよそ１０年で替わる学習指導要領に対して，改訂作業が始まるだろう２０２６年頃までにエビデンスを伴う美術教育の具体的事例が必要になる。昭和５２年の造形遊びの導入に関しても現場の事例が導入の説得力を持った。現行の学習指導要領の解説でも，「例えば」と，具体的な事例が重視されている。社会が予想できないほど大きく変化しようとしている中，美術教育の不易を踏まえ，どのような美術教育の流行を提案できるかが，我々が未来に向かってすべきことであろう。そのためにも実践現場との協働が必要になってくる。その様な中で，文化庁に移管された芸術教育「図画工作・美術」はこれらどのような戦略を持ち得るのだろうか。文科省下では行われなかった「芸術系教科等担当教員等全国研修会」が本年度全国の教員対象に行われ，盛況であったことを我々はどのように捉えたらよいのだろうか。このような現場のニーズに対して美術教育に関わる学会及び団体は何ができるのであろうか。

一方，社会に目を転じれば，政府は Society5.0 の金看板の下，必死にデジタル社会への対応への遅れを取り戻そうとしている。昨年ニュースになった LINE と Yahoo! JAPAN の経営統合も今後の生き残りをかけた選択と言われている。政府も AI の進化と共に IoT を生かした社会構造の変化を進めたいが，なかなか島国である閉じた日本社会は劇的に変えることができない。よって，消費税アップとセットでデジタル決済の普及や，オリンピックの名の下で行われるデジタル社会への移行に躍起になっている。プログラミング教育もデジタル化対応の一環である。Society5.0 に向かう教育政策の動向に関しては文科省以上に内閣府，総務省や経済産業省が指導力を持っていると言ってもよい。

先日，埼玉県戸田市[ii]の小学校でプログラミング教育の研究発表があった。そこではマイクロソフトと連携しプログラミング教育を進めていた。授業を見学し感じたことは，プログラミング教育には図工ならではの発想や構想を生かした授業提案ができるという点である。美術教育が得意とする拡散的思考を効果的に取り入れることでイノベイティブな思考も身につくだろう。当日講演を行ったマイクロソフトの担当者もその意見には同感であると述べた。しかし現場では図画工作・美術が持つ教科としての特徴及び他教科に対しての優位性，その本質的な理解が進んでいないため，図工の学びを活用するまでに至っていない。つまり，「感性や想像力を働かせ，対象や事象を創造的な視点で捉え，自分としての意味や価値をつくりだすこと」[iii]という，創造教科の特質がすべての教員に十分に理解されていないからだと言えるのではないか。未だもって図画工作・美術教育で育まれる能力の本質的な理解がまだまだ市民権を得ていないのである。前掲の諮問にも出てくる STEAM 教育に対しても同様であろう。ART を，成果を視覚化するためのツールとして使われたり，または ART をリベラルアーツとして位置づけられたりすると，今まで学会会員が取り組んできた美術教育の研究を生かす場も少なくなろう。ここでも説得力ある具体例が必要となる。

閉じた世界

2012 年に「閉じこもるインターネット」という本が出て話題になった。そこでは 2009 年 12 月 4 日にグーグルが検索エンジンに推測機能を加えた事が書かれている。現在では当たり前になったこのお節介な推測エンジンは，AI の１つとして私たちの暮らしに最適化を与えてくれる。その最適化とは異質なものを排除し一人一人のニーズに合った個別化の提案であり，AI の判断で個人が求める欲求を先回りし提供してくれるというものである。フェイスブックなどの SNS も，いつの間にか似たような傾向を持つ記事ばかりで固められてしまうのは，「いいね！」のクリックや閲覧ページに対し推測エンジンという AI が働いているからである。私たちはこの推測エンジンによる最適化の中で，異質なものや多様な考えに触れる機会を削がれて，フィルターバブル（偏った泡）の世界にいつの間にか快適に閉じこもるようになるという。これからの時代，提供されるパーソナライズされた情報と引き換えに，いつの間にか個人にとって興味の無い情報，都合の悪い情報が遮断されたフィルターバブルの世界が訪れるというのである。私たちは今以上に努力して，異質なもの，多様性に対して理解を示していかないとならない。

人間は同質の傾向を持つ人間同士で集団化しやすく，また同志を求める本能がある。同志のつながりは力強いが，異質な意見を聞く力が無ければセクトやカルトになって行く。学会もその危険性が常に同居している。研究

者自身も個々のオリジナリティーを持ち，異分野との交流で研究を深めていくことが求められ，学会総体としての多様性を確保していく必要性があろう。

この多様性について，「体」について研究している美学者の伊藤亜沙は，「『ダイバーシティー』や『寛容性』などの言葉をちりばめた『べき論』によって，個人の環世界[iv]を無理やり開かせようとするのは，場合によってはかなり暴力的な行為なのではないかと感じます。むしろ，私たち一人一人の中にある保守性を認めることが，安心して『開く』ことにつながるのではないでしょうか」と述べている[v]。この「保守性」という言葉は，研究，学会，組織，あるいは文化，国籍など様々な言葉に置き換えられよう。その保守性を認め，個を開いていく装置の１つがアートであろう。

大学にほど近い所沢市立三ヶ島中学校で，全校で朝鑑賞という取り組みを３年間続けている。週に１回，金曜の朝に１０分間，朝読書の活動に代えて絵などを自由に見る試みだ。学級担任はその朝に鑑賞する作品を抱えてクラスに向かい１０分間生徒と共に感想を語り合う。この取り組みは授業では無いし教科でもないので成績を付ける必要も無い。生徒一人一人，自分の感じたことを素直に発言すればよい。その結果，生徒は多様な意見を聞くようになり，発言率が増し，主体性が出てきた。3 年目にはメタ認知と偏差値の向上が見られた。感じたことを素直に言えるたった 10 分の朝鑑賞で自己の「保守性」が学級という集団に認められ，社会に対して自己を開いていく力に繋がっていったと考えられる。

実践を変えていく力を持つ

今美術教育に求められているものは今後発生する諸課題に対してヴィジョンをもって美術教育を活性化し改善していく力を持つことである。理論研究も実践研究も，引用され活用されなければ研究としての価値は生まれない。その点では理論，実践の旧来の区分も意味を成さなくなってきている。勿論，理論研究や実践研究そのものを真っ向から否定するものではない。それらの研究が実践現場との協働により今まで蓄積してきた学会の貴重な研究や資産が生かされ，未来をつくり出す教育に生き続けていくことが必要なのである。美術という教科が現場から消えたときに我々の研究は化石となり未来の研究者が発掘するまで土に埋もれていくだろう。個々の研究者の研究内容や研究の姿勢を批判しているのではない。組織全体として研究を生かすあり方を考えなくてはならないという問題なのである。

例えば，国への政策提言では一学会からの意見は相手にされないと聞く。学習指導要領の改善に対する意見徴収においても参考にされるのは国の調査や国が委託した民間の調査，全国の校長会等の現場からの意見である。その様な状況において美術教育のよりよい形を提言し教育政策に反映させるためには現場から大学の研究者までを巻き込んだ１つの教育研究団体が必要であり，理論と実践とそのエビデンスをもって提言しなくてはならない。それには全国の美術教育研究者と実践者が，様々な意見をぶつけ合い，時代に応じた納得解を出していく場が必要である。

学会及び研究団体の統合，または統一団体の傘下での各研究部会化は喫緊の課題である。2016 年 10 月，美術教育関連の８団体が美術教育連絡協議会を立ち上げ，小野康男（国立大学法人横浜国立大学）が代表となり，松野博一文部科学大臣に美術教育提言を提出した。その８団体とは，公益社団法人日本美術教育連合，全国造形教育連盟，全国大学造形美術教育教員養成協議会，大学美術教育学会，日本教育大学協会全国美術部門，日本教育美術連盟，日本美術教育学会，そして美術科教育学会である。各団体を代表する研究者，実践者，学校長が，何度も名古屋に集まり美術教育のあり方について議論し提言を作成した。

今日，美術教育が抱える様々な課題に対し，少しでも前に進むには，そして自らの力で未来の美術教育をつくり出していくには多様な英知を集結できる上記のような統一団体が必要なのである。

「組織は設立した時点でその保守に向かう」と，ある先輩が言った。保守に向かう力が強まれば創造性を失う。それでは未来をつくり出す力を持つはずがなく枯れるのを待つだけだ。これからは理論と実践の融合，理論研究と教育実践の協働による多様性と具体性を持つことが，新しい時代をつくる母体となると考えている。これからの美術教育は，関わるすべての人たちが議論できる場を社会に向けて開いていくことで，すべての実践者と研究者とともに明日の美術教育の研究が始まると信じている。

---

[i] 免許外教科担任制度の在り方に関する調査研究協力者会議報告書，資料 4-2，2018, 9, 18，文部科学省

[ii] 埼玉県戸田市教育委員会　産官学との積極的な連携を行っている

[iii] 中教審答申（2016. 12. 21）別紙資料「各教科等の特質に応じた見方・考え方のイメージ」

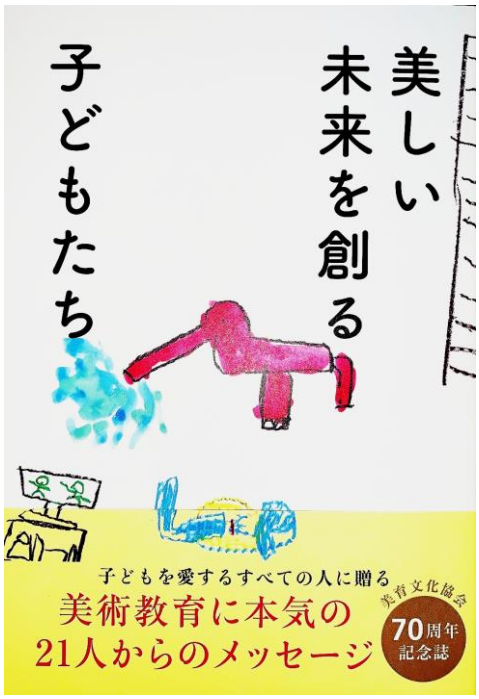
[iv] 環世界　ヤーコプ・フォン・ユクスキュル（1864-1944 エストニア, 生物学者）の提唱した概念

[v]「環情報世界」渡邊淳司, 伊藤亜沙, ドミニクチェン, 緒方壽人, 塚田郁那ほか, NTT 出版, 2019

新刊紹介　美育文化協会 70 周年記念誌

『美しい未来を創る子どもたち』公益財団法人美育文化協会，2019 年

新関伸也（滋賀大学）



■ 編集の趣旨及び方針

総合文具メーカー「ぺんてる」が社会貢献の一環として 1950 年(昭和 25)年「美育文化協会」を設立し，その 70 周年を記念して企画出版されたのが本書である。四六判，全 352 頁の簡易製本くるみ表紙の体裁で，帯には「子どもを愛するすべての人に贈るー美術教育に本気の 21 人からのメッセージー」と記されている。価格は消費税及び送料込で 1,000 円。Amazon から検索して，購入可能である。

まず本書の「はじめに」で元文部事務次官や東京国立博物館長を歴任した協会理事長の銭谷眞美氏は，次のように述べている。

「・・第二次世界大戦後 1950 年(昭和 25)年，子どもたちの感じたことや思いを表現する活動を支援すること通じ，日本の新しい文化を生み出そうとの思いで美育文化協会は立ち上げられました。奇しくも，令和という新しい時代を迎えた今日，美育文化協会は，70 周年という節目を迎えました。これを機に初心に立ち返り，『美しい未来を創る子どもたち』のテーマのもと，美育文化協会に関わるものが子どもたちへの思いを込めた論考を寄せ，ささやかな一冊の本を編みました。・・」

このように協会創立 70 周年を機に，当初の設立趣旨を再確認するとともに，未来に生きる子どもたちを育む指針となるような論考をメッセージとしてまとめたということになる。ここで，美育文化協会の名称に使用されている「美育」の意味を改めて押さえておきたい。「美育」は，辞書で次のように説明されている。ー【美育】「美の鑑賞と創作の能力を養うことによって人格の向上を図る教育。美的教育」（『広辞苑・第七版』岩波書店）／【美育】「審美眼をうえつけ芸術心を養うことを目的とする教育。音楽・体育・国語等の教科を通じて行う」（『岩波国語辞典・第七版』岩波書店），／【美育】「音楽・図画・国語などの教科を通して美や芸術に対する興味・理解を深めるための教育」『新明解国語辞典・第七版』（三省堂）ーとなっており，人格形成にふれた『広辞苑』以外は「美育」を「芸術に対する興味や関心を養い深める教育」という解説で，今を生きる子どものよさや可能性にまで踏み込んで言及してはいない。とは言え，「美育」の背景には「Education though arts（芸術を通した教育）」があり，教科を通した人格形成や情操教育をねらいとし，究極的には子どもたちの存在そのものを肯定する積極的な意味が内包されていると解釈できよう。

■本書の構成と執筆者

本書の構成と内容は以下のようになっている。目次のタイトル，筆者に職種を加えて示した。なお執筆者の顔ぶれは大学教員，元大学教員，元東京都図工研究会に所属した教員，幼稚園教諭，指導主事など，いずれも日本の美術教育の理論と実践を代表するメンバーである。一線を退いた方々，活躍中のシニア教員，これからを担う若手教員と老若とりまぜた執筆陣で，戦後世代から壮年そして若手に美術教育のイデアをつなぐ人選となっている。内容的には，論文調で書かれたものではないために読みやすい文体で綴られている。各自のエピソードや実践を交えつつ，むしろエッセイに近い書き方のため，どこからでも読み進めることができる。

・はじめにー銭谷眞美（美育文化協会理事長）／巻頭言対談会

第Ⅰ部 未来に生きる子どもたちの表現のありのままを愛で受けとめる

・絵を通して知るこどもの真実ーこどもは世界をどのように捉え，どのように表すのかー大橋功（岡山大学大学院教授）/子どもの絵の美しさ，そして子どもが描く・つくるということをめぐってー佐藤賢司（大阪教育大学教

授）/「自分らしさ」って誰のためにあるのだろう?ー馬場千晶（大学非常勤講師）/未来へ向かい，懸命に生きる証しとしての幼児期の子どもの絵ー大橋麻里子（帝京平成大学非常勤講師）/自然と共に生きる子どもたちー藤田雅也（静岡県立大学短期大学部准教授）/幼児にとっての造形表現ー槇英子（淑徳大学教授）

第Ⅱ部 かけがいのない子ども時代を生きるために

美を通して子どもを育てる文化ー辻政博（帝京大学教授）/切り取られた先にあるものー南伸裕（新潟市立総合教育センター指導主事）/感覚をともなう体験が自分をつくる子どもと体験と関わる図画工作の表現活動ー玉置一仁（練馬区立光が丘第八小学校図画工作科教諭）/乳幼児の表現の理解と援助についてー花原幹夫（白梅学園短期大学教授）/子どもの思いを未来につなぐー平田耕介（新宿区立津久戸小学校図画工作科教諭）/未来は子どもの夢がかなった姿―清田哲男（岡山大学大学院教授）/造形ワークショップの前にー杉山貴洋（白梅学院大学講師）/造形へのはじめの一歩ー星野沙耶花（いずみ幼稚園教諭）/こどもの絵を通して学ぶー羽渓了（龍谷大学短期大学教授）

第Ⅲ部　美しい未来を創り続ける子どもたちの教育のあり方を考える

豊かな情操を育む教育の重要性ー銭谷眞美（美育文化協会理事長）/よく見えない明日だけどー藤澤英昭（千葉大学名誉教授）/子どもたちの信徒ー鈴石弘之（元東京都公立小学校図画工作科教員）/『美育文化』創刊号に思うー水島尚喜（聖心女子大学教授）/前提を更新することー神野真吾（千葉大学准教授）/《文化》をつくる子どもたちー西野範夫（元上越教育大学教授）/あとがきー平間直樹（美育文化協会常務理事）

■本書の要旨と紹介

本書の冒頭では「巻頭座談会『美しい未来をつくる子どもたちへ』」と題した銭谷眞美，西野範夫，藤澤英昭，水島尚喜，平間直樹氏５名による対談記録がある。協会の設立の理念や50年に及ぶ「世界児童画展」の事業に触れつつ，造形遊びの理念や教育課程改訂の経緯などを話題にしながら，各理事の美術教育に対する現在のスタンスが語られている。以下，各理事の印象に残った内容を紹介したい。

平間「例えば，絵の上手，下手をいうのではなく，絵を描くことの持つ，本質的な意味，効用を考えるー子どもの成長過程に美術を通して貢献していくーこうした意図を持って今日まで本協会は活動を続けてきました」(p. 6)

銭谷「平和や文化を希求して，戦後の国づくりが始まった。そういう時代の中で，美術教育，子どもの感性を育てることも非常に大事だ，ということで美育協会はできたわけで，時々はそこへ我々も立ち返るといいんじゃないかなと」(p. 7)

水島「人生で最初にクレヨンの蓋を開けて手にしたときの感覚って，今も残っているんですよね。子どもにとっての色の世界，そして形につながって，自分をつくっていく。これで何かできちゃうぞ，というものすごいワクワク感がありました」(p. 7)

西野「『美育』っていうのは子どもが絵を描くということではなくて，すべての教育が『美育』でなければいけないというのが美育文化協会の原点だと思う。子どもが絵を描くという行為そのものが教育や社会を変える行為なんだよね」(p. 7)

藤澤「文化を効率よく教えようとすると，本来，子どもの活動の自然な広がりの中から文化が構成されていけばいいなぁという話が逆転しちゃうんですよ。だから，教育というのは，効率を求めるようになると『早い話がね』となり，大事なことが全部抜け落ちてしまう。そうゆう傾向があるんだよね」(p. 9)

ここ浮かび上がるのは，図工・美術科の教育を通して人格形成に寄与することに加えて，子どもに対峙する大人（=教育）のあり方まで示唆するものである。教科の理念に収まらない教育観を各々自覚的に語った内容で，子どものよさや可能性を見出す，まさに「美育」のねらいが述べられている。

なお，本書の構成は前述のように三部構成で，明確なテーマの区別はつきにくいが第Ⅰ部では，子どもたちの表現の受容，いわゆる表現過程や作品を通して，個々の子どもを丸ごと受け止める教師（＝大人）の姿勢について各々の観点や立場から述べている。第Ⅱ部では，第Ⅰ部と共通した教育観に加え，子ども時代を生きることやその意味について，造形活動を通して再考を促している。第Ⅲ部では，未来を生きる子どもたちの視点から，「今必要な教育の在り方とは何か」を教師や大人に問いかける内容となっている。

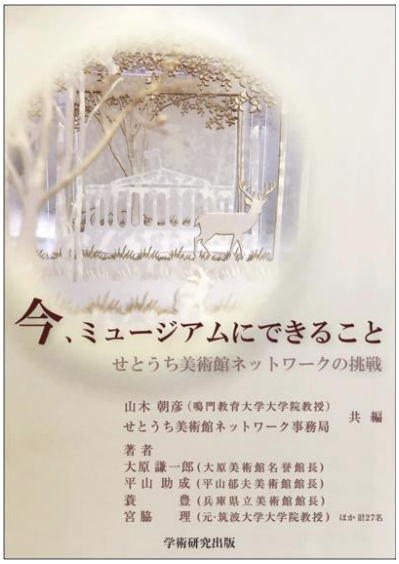
なお，筆者ごとに色用紙で見出しがついており，タイトルとともに主張を端的にあらわす文章が抜き書きされている。これは美術教育の「珠玉のことば」で，造形指導の在り方に迷ったときの道しるべとなる。評者が印象に残った言葉では「子どもたちに伝えたいことは一体何だろうか。制作に熱中して，目を丸くして小さな未来を見ている子どもたちに伝える言葉なんであるのだろうか。（杉山貴洋）」である。この内なる子ども性の自覚と省察，そして非言語的な表現の意味を我々が繰り返し噛みしめてこそ，真の美育と文化が生まれるのであろう。

新刊紹介

共編：山木朝彦，せとうち美術館ネットワーク事業局

今，ミュージアムにできること－せとうち美術館ネットワークの挑戦－

畑山未央（東京家政大学）



１.「せとうち美術館ネットワーク」に向ける編者のまなざし

「せとうち美術館ネットワーク」は，瀬戸内海地域の美術館や博物館などの文化芸術施設をネットワーク化し，地域の交流促進および活性化，子ども達の美術鑑賞教育の普及を図ることなどを目的として 2008 年 10 月に発足した。このプロジェクトは，高速道路を維持管理する本州四国連絡高速道路株式会社がメセナ活動の一環として始めた事業で，企業と，アドバイザーである多数の研究者と，そしてネットワークに参加している 72 の文化芸術施設（2020 年 1 月現在）との共創により，一帯の芸術・文化振興の確実な活性化につながっている。

さて，本書『今，ミュージアムにできること－せとうち美術館ネットワークの挑戦－』は，「せとうち美術館ネットワーク」10 周年を振り返り，毎年の取り組みの一環である特別講演会に登壇した演者のエッセイを中心に，アドバイザーらの論考を加えた理論と実践の両面から構成されている。タイトルに込められた意味について，編者の山木朝彦が「まえがき」にて触れているので，その言葉に耳を傾けてみよう。

「急速に浸透し始めたアートマネジメントという領域の言葉を借りるなら，『今，ミュージアムにできること』の中心に，〈地域の魅力を活かした鑑賞者開発〉という課題を捉え，さらなる発展を目指すことこそ，本ネットワークの挑戦になるはずです。それはまた，今世紀前半，世界のミュージアムが取り組むべき共通の挑戦になるでしょう。」

学習観や知識観が変化する時代の中で，文化芸術施設の教育・普及機能も地域市民の多様な学びや「ウォンツ」，複雑化する社会情勢などに寄り添いながら，経験や学習や価値をどのように生み出すかへと役割を変えつつある。その役割は，人とモノの結びつきを越え，地域の特徴や館固有のリソースなどを媒介に人と人とを結ぶコミュニケーションのデザインとも言えるかもしれない。

２．本書の内容

本書の章立てと，それに基づくバラエティ豊かな論考についてピックアップしてみる。紙幅の関係上，全ての論考に触れることが困難なのが心苦しいが，各タイトルが非常に有意義なので，是非お手にとってご覧いただきたい。

第１章は美術館内で創出された実践に関する論考である。大原美術館，平山郁夫美術館，兵庫県立美術館，大分市美術館，岡本太郎美術館，世田谷美術館，東京国立近代美術館，板橋区立美術館の各館における歴史的文脈や教育普及プログラムの取り組みなどについて，来館者の学びのプロセスを辿りながら詳細に語られている。

第２章は，地域や学校とつながる美術館の実践事例に関する論考である。宮脇理は，横浜美術館子どものアトリエの構想・発足・運営の道程を追いながら，時代の節目に関わった人々の意識を描写し，いまの美術館教育に目を向けている。横浜国立大学の修士課程創設期に宮脇が果たした役割の大きさが理解できるとともに，当時の院生達が，今で言うアクティブ・ラーニングを行なっていたことにも気付かされる。濱口由美は，徳島県立近代美術館との連携による鑑賞学習教材の開発から実践に至るまでの取り組みや福井市美術館との共同による「多言語ストーリーテリング」のプロジェクトなどの成果を鑑み，「他者と共に育つ鑑賞教育」の提案を行っている。高松智行は，自身の教員としての多忙な日常の軸を「外界」へ移行すべく駆け込んだ美術館での鑑賞体験を基に，そこでの価値を目の前の子ども達と共有することで得られた教師と子ども間の新たな関係性と意義について，教師が抱える現状に寄り添う目線で論じている。井上由佳は，ミュージアムをつなぐネットワークに着目し，日本と英国の事例と役割を比較しながら「せとうち美術館ネットワーク」の意義に立ち返り，今後は人と人をつなぐ人的交流が必要であると展望している。山木朝彦は，英国のテイト・ギャラリーの歴史的文脈を概括しつつ，TATE が有する教育機能の媒体や方法について詳細に紹介している。とりわけ，美術分野だけでなく，他教科の領域まで架橋する教材，ミュ

ージアム連合体が運営するプロジェクトを通した参加者の社会的認識の深化のあり様などを「せとうち美術館ネットワーク」の今後と結びつける慧眼に読者は多くを学ぶであろう。

第３章は，ミュージアムのネットワークトポロジーの論考である。前田ちま子は，かつての自身の米国調査で見聞した Hands-on，workshop，VTS（Visual Thinking Strategies）の理念や実践を時系列で追い，日本の美術館教育や学校との連携への影響を論じている。美術館教育の様相を迷いの森に喩え，出口の開かれた可能性を俯瞰する流れに我々読者は引き込まれる。赤木里香子・山口健二は，社会教育機関とされる我が国の美術館に従事する学芸員専門性の高さが大学教員のそれと相同性が高まっているとしつつ，一方で両者の“奉仕すべき対象”が異なるがゆえに美術館の学習者支援が多岐にわたることをわかりやすく明らかにしている。同時に，モノを起点とする美術館の教育支援の意義を改めて我々に突きつけている。

第４章は，アートとデザインの鑑賞，創作，研究のための理論的論考である。徳雅美は，美術教育の理念や芸術スタンダード，教員養成プログラムなどについて日米を比較した論考を行い，自身の研究テーマである「描画と美意識の発達の比較研究」につなげながら，描画発達に現れる普遍性と文化的特異性の考察を展開している。渡辺邦夫は，「デザインとは何か？」という問いから，自身の代表的なデザイン実例として「海バス」，「環境保護ポスター/平和ポスター」，「色相環の絵の具の開発」などを紹介・解説し，読者を見事に「デザインの真理」へと導く。そして美術館の役割にデザインを組み込むことへの次なる問いかけを我々に提示している。三根和浪は，「せとうち美術館ネットワーク」を構成する諸施設や活動内容の性格的側面から，その核心は「美術鑑賞」であるとし，先ずは鑑賞の構造や発達段階など多角的アプローチから学術的に論じている。その論考に基づき，鑑賞の授業における工夫の観点について我々が享受する機会を提供している。佐二木健一は，生命科学を研究する理系の立場から，工芸教育の重要性を説く。「科学技術が圧倒的な力を持つようになる中で，より良い未来のためにそれを使いこなす人間性が，これからは決定的に重要になってきます」という佐二木の言葉にリンクするように語られる「やむちん」（沖縄で 400 年以上の歴史をもつ伝統工芸）との出会いのストーリーは，美術教育に携わる我々に，頼もしくそして説得力をもって響いてくる。金子宜正は，自身の研究の一環であるベルリンの「イッテン・シューレ」でのヨハネス・イッテンと日本人の相互交流について，その事実を剔抉していく研究プロセスをエッセイ形式にまとめている。また，調査の過程で活用した欧州の美術館や資料館等の文化施設の利用のしやすさや機関同士の連携の充実にも触れ，それらが一般に開かれた文化的施設だけの機能にとどまらず，研究者たちをつなげ，新たな研究を発信するプラットフォーム的役割も担っていると結ぶ。

３．魅力の所在

我々が手にする博物館や美術館に関する書籍，とりわけその教育に関する我が国の論考は，理論に基づく内容や各施設の実践事例の紹介というコンテクストが主流な印象である。それを踏まえると，本書を読むにつれて，それらのコンテクストに研究者・学芸員や来館者，教師，子ども達の生々しい息づかいがエッセンスとして加わっている感覚を憶えることができる。言い換えれば，我が国のミュージアム教育の論考の慣例的なアプローチを越えて，実践家の思惑と来館者の感受や行為の関与が相互作用的に結実していきながら場の意味が形成されていく過程をこそ丁寧に描写しているのである。

本書は「せとうち美術館ネットワーク」の様々な取り組みに関するドキュメントを論の核としながら，関係者の専門知と経験知の相互作用によってプロジェクトの意義を理論的に強化している労作である。尚且つ，著者それぞれの「せとうち美術館ネットワーク」に対する期待と展望の眼差しが，地域の魅力を活かしたネットワークデザインのあり様を考える機会を我々に提供してくれる。「せとうち美術館ネットワーク」が発足して 10 年を越え，またこの先の 10 年を考える契機となる本書。アートと地域を結ぶマネジメントの取り組みの中で，市民が地域のよさに触れ，気づき，そしてその共同体の中で活動が認知されて拡がっていくという向上的な循環の先に見えてくるのは，きっと紛れもなく〈地域の魅力を活かした鑑賞者開発〉だと思う。

下記に本書への敬意を込めて執筆担当者を掲載します。

◆編者

山木 朝彦，せとうち美術館ネットワーク事務局

◆著者（五十音）

赤木 里香子，伊藤 周雄，今井 陽子，井上 由佳，大原 謙一郎，金子 宜正，栗原 祐司，酒井 孝志，
佐二木 健一，菅 章，高松 智行，塚田 美紀，徳 雅美，仲野 泰生，野呂田 純一，濱口 由美，平山 助成，
弘中 智子，前田 ちま子，三原 修二，三根 和浪，蓑 豊，宮脇 理，守田 庸一，山口 健二，山木 朝彦，
山下 治子，渡辺 邦夫

◆出版社：学術研究出版　**◆ISBN**：978-4-86584-439-9　**◆出版日**：2019 年 11 月 20 日　**◆価格**：1,600 円＋税

本部事務局より

■第 42 回美術科教育学会千葉大会の総会の委任状について

2019 年度総会は，大会の２日目，2020 年３月 28 日（土）の 12 時 50 分より開催予定です。会則で定めているように，総会は，学会の事業及び運営に関する重要事項を審議決定する学会の最高議決機関であり，会員の５分の１以上（ 委任状を含 む）の出席がなければ成立しません。やむを得ない事情で総会に欠席される方は，同封の委任状（はがき）に必要事項を記入，押印の上，３月 11 日（水）までに投函してください 。

■2020 会計年度までの会費納入はお済みですか

「2020会計年度会費」は，2020年７月末日までに納入いただくようにお願いしています。もし，未だの場合は，至急の納入をお願いします。３月の年次大会，リサーチフォーラム，地区会，学会誌刊行などの学会運営は，会員の皆様の会費により運営されています。

ご自分の各年度の年会費納入状況については，以下の「会員情報管理システム」にログインすることにより確認が可能です。
https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/AAE

なお，納入状況に疑問がある場合には，下記の本部事務局支局アドレスにお問い合わせ下さい。

＜留意事項＞

次年度学会誌（第42号）への投稿並びに次年度大会（第43回大会）での口頭発表に際しては，投稿や申込みの時点で以下の２つの条件を満たしている必要があります。

①会員登録をしていること
②当該年度（2020会計年度）までの年会費を全て納入済みであること。
＊ 会費を２年間滞納した場合は，会員資格を失います。

会費納入に関するお問い合わせ先：
（株）ガリレオ 東京オフィス　　担当者 和久津君子
［窓口アドレス］ g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp

■会費振り込み口座名・番号

２月の学会通信に同封の振込用紙，郵便局にある払込用紙または銀行等からの振替により下記の口座に納入してください。

・銀行名： ゆうちょ銀行
・口座記号番号： 00140-9-551193
・口座名称： 美術科教育学会 本部事務局支局

通信欄には，「2020会計年度会費」等，会費の年度および会員ID番号を記入してください。また，ゆうちょ銀行以外の銀行からの振込の受取口座として利用される場合は，下記内容を指定してください。

・店名（店番）： 〇一九（ゼロイチキユウ）店（019）
・預金種目： 当座 ・口座番号： 0551193

■大学院生等への会費減額措置（申請は毎年必要）

大学院生等は所定の手続きにより，年会費を半額（4,000 円）に減額する措置を受けることができます。会費減額措置を希望する大学院生等は，毎年，５月中に各自，申請手続きをすることになっています。申請しない場合は，減額措置を受けられません。

未だ手続きがお済みでない方は，学会ウェブサイトをご参照ください。
http://www.artedu.jp/bbfet2or4-8/#_8

なお，本制度は，大学院生等に対する経済的な支援を目的として設けられています。指導教員の先生は，申請者が，以下のいずれかに該当するか確認の上，申請させて下さい。

① 勤務先を持たない「大学院生又は大学院研究生」である。
② 勤務先を持つが，「長期履修制度」等を利用し，当該会計年度の間，無給の「大学院生又は大学院研究生」である。

■学会誌第 41 号に投稿され，掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様へ

学会誌第 41 号に投稿された会員で，掲載が許可された後，掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様にお知らせします。公費払いとは，大学研究費や科学研究費補助金などで支払うことをさしています。掲載負担金は，掲載ページ数が確定した時点（３月初旬を予定）で請求します。本部事務局支局からの請求書にしたがってお振込みください。ただし，各所属先が求める形式で請求書類を別途用意しなくてはならない場合は，そこから本部事務局支局と相談・交渉し始めたのでは，手続きが間にあわないことがあります。以下の留意点を読み，各所属先で前もってご確認いただき，相談・交渉するなど今から準備を始めて下さい。

＜留意事項＞

１．原則として，必要な書類は，投稿者自身で作成いただき，書類等に捺印が必要な場合は，本部事務局支局までお送りください。作成いただく書類は，本部事務局支局からの「振込負担 金請求書」以外の書類全てとなります。また，送付前に事前に以下までご連絡下さい。
２．投稿者自身による「立替払い」を原則と致します。
３．上記 1，２を原則としますが，大学事務局と本部事務局支局が直接やり取りをしなければいけないケースがあります。この場合には，以下まで，手続きの概要，事務担当者の連絡先などをメールで知らせて下さい。

美術科教育学会 本部事務局支局
〒170-0002 豊島区巣鴨 1-24-1-4F
（株）ガリレオ 東京オフィス 担当者 和久津 君子氏
［ 窓口アドレス］ g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp

迅速な手続きのため，ご確認及びご準備について，ご協力をよろしくお願いします。

■住所・所属等変更，退会手続き

住所，所属先等に変更のあった方は，すみやかに本部事務局支局までご連絡ください。退会を希望される場合は，電子メールではなく，必ず文書（退会希望日を明記してください）を郵送にて，本部事務局支局宛にお送りください。

あわせて，在籍最終年度までの会費納入完了をお願いします。

■学会通信

年間３回の刊行（６月，10月，２月頃）を予定しています（原稿締切りは，発行日のおよそ1か月前）。

紙面には，重要なお知らせのほか，「新刊紹介」「研究ノート」について，会員からの原稿を掲載しています。投稿希望の会員は，学会通信担当・竹内までお問い合わせ下さい。

『学会通信』ペーパーレス化に関する検討について（再掲）

2019年度・第１回理事会にて，「『学会通信』ペーパーレス化に関する検討スケジュール」についての報告がなされました。本部事務局では，2020年度中に『学会通信』の紙媒体での刊行を廃止して，ウェブ公開に一本化することに関する検討を進めております。

美術科教育学会 本部事務局

■ 鳴門教育大学　〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地 鳴門教育大学教職大学院
山木朝彦(代表理事) artedu@dc5.so-net.ne.jp　TEL 088-687-6485

■ 大阪教育大学　〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4－698－1 大阪教育大学美術教育講座
佐藤賢司(総務担当副代表理事／本部事務局長／規約等) ksato@cc.osaka-kyoiku.ac.jp　TEL 072-978-3732
渡邉美香(会計・名簿等) mwatanab@cc.osaka-kyoiku.ac.jp　TEL 072-978-3736
新井馨(会計・名簿等／本部事務局運営委員) arai-k49@cc.osaka-kyoiku.ac.jp　TEL 072-978-3738

■ 奈良教育大学　〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学美術教育講座
竹内晋平(学会通信等) shimpei@nara-edu.ac.jp　TEL 0742-27-9038

■ 奈良教育大学　〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学美術教育講座
宇田秀士(研究担当副代表理事／学会誌編集委員長) udah@nara-edu.ac.jp　TEL 0742-27-9223

■ 早稲田大学　〒169-8050 東京都新宿区西早稲田１丁目６－１ 早稲田大学教育・総合科学学術院
大泉義一(事業担当副代表理事／ウェブ) oizumi@waseda.jp　TEL 03-3208-1703

美術科教育学会 本部事務局 支局

■ （株）ガリレオ(www.galileo.co.jp)　東京オフィス　〒170-0002　豊島区巣鴨1-24-1-4F
（ 担当者　和久津君子 ）　TEL: 03-5981-9824　FAX: 03-5981-9852

※　第９期 理事・監事は，上記の山木，佐藤，宇田，大泉，竹内，渡邉のほか，下記の17名が担当しております（50音順）。

・理事：　相田隆司（東京学芸大学），赤木里香子（岡山大学），上山浩（三重大学），奥村高明（日本体育大学），金子一夫（茨城大学名誉教授），神野真吾（千葉大学），直江俊雄（筑波大学），中村和世（広島大学），永守基樹（和歌山大学名誉教授），新関伸也（滋賀大学），西村徳行（東京学芸大学），三澤一実（武蔵野美術大学），水島尚喜（聖心女子大学），三根和浪（広島大学），山田芳明（鳴門教育大学）

・監事：　新井哲夫（群馬大学名誉教授），山田一美（東京学芸大学）

以上